

## 藩政期における大野城下の町家建築

吉 田 純 一\*

### The Town-Houses of the Ohno-Castle-Town in Edo-period

Jun-ichi Yoshida

This paper deals with the town-houses of the Ohno-castle-town from the middle to the late Edo-period. The merchants had the house called 'Kuraya' that was like storehouse coated the surface by the plaster. The many of the tradesmen had the 'Kuzuya' form house with the reed-thatched roof. After the conflagration at the An-ei 4 (1775), the Ohno clan commanded the tradesmen that they exchanged the 'Kuzuya' house to the 'Kuraya' house. The 'Kuraya' form houses were increased and the 'Kuzuya' form houses decreased at Tempo 15 (1844). But the houses with the reed-thatched roof did not disappeared at the last Edo-period.

There were about 100 'Zinagoya' and 60~70 'Kashiya' in the Ohno-castle-town during the Edo-period. 'Zinagoya' were the houses of layer tradesmen that had not own premise. The 245 storehouses called 'Dozo' were burned at the conflagration of An-ei 4.

#### 1. はじめに

越前大野市は、金森長近によってつくられた天正期の町割を今もよく留めている。東西筋の六間～八間通り・石灯籠小路・正膳町通りや南北筋の一番通りから五番通り、多くの寺院が建ち並ぶ寺町通り、そして町屋敷の背後を流れる背割用水などはほぼ建設当時のままである。

これらの各通りに面してたつ町家は、瓦葺きで、登梁や腕木を用いて深い軒をつくり、軒下の袖壁や正面の下屋庇、出格子など、伝統的な表構えをもっているものが多い。

ところが、平成10年8月の調査の結果、これらの町家はほとんどが明治21年あるいは明治32年の大火後につくられたことがわかった。伝統的な表構えをみせているが、現在の大野市内にみられる町家は、決して江戸時代に遡るような古いものではないのである。したがって、現存の町家を調査するだけでは藩政期における大野城下の町家の様相を明らかにすることはできない。

本稿は、以上のような観点から、古絵図や古文書を手がかりにしながら藩政期における大野城下の町家の実態を明らかにし、今回の町家調査の補足とするものである。

---

\* 建設工学科 建築学専攻

## 2. 享保期・安永期・天保期における町家建築の様相

金森長近は大野に入部した天正3年(1575)から同14年に飛騨高山に移るまでに亀山の地に大野城を築き、その東麓から東側にかけて順に家中屋敷、町人地、寺町を配し、大野城下の基盤をつくりあげた<sup>1)</sup>。

江戸時代になると、寛永元年(1624)に福井藩初代結城秀康の3男直政が大野藩を興し、その後、秀康の5男直基、6男直良そして直良の子直明まで約58年間の松平時代があり<sup>2)</sup>、天和2年(1682)に土井利房が入城してから明治までの186年間は土井家8代の治世であった<sup>3)</sup>。この間にも大野城下は整備、拡大していったが、長近によって築かれた町割の基盤は変わらなかった。ただし、長近時代や松平時代の詳しい町家の様子は明らかでなく、町家の様相が具体的にわかるのは利房入城から約50年経った享保期以降のことである。

表-1、表-2、表-3はそれぞれ享保期、安永期、天保期における大野城下の町家建築の様相を町別に示している。表-1は、享保15年(1730)10月の年紀をもつ大野城下の町絵図<sup>4)</sup>、表-2は安永4年(1775)4月8日に発生した火災の焼失記録<sup>5)</sup>、表-3は天保15年(1844)の大野町絵図<sup>6)</sup>をもとに作成したものである。史料の記載形式が一定でないために建築種別や町別など統一されたものではないが、享保から天保における大野城下の町家建築の様相や変遷を捉えることができる。

まず、これらの表にみられる建築についてみる。

「蔵家」は土蔵造りあるいは塗家造りの家屋をさしている。しかし、川越市や高岡市にみられるような本格的な土蔵造りの住宅は現在の大野市内には1棟もなく、五番町にある宇野金作家住宅のように、表構えを漆喰壁で塗り込めた、いわゆる塗家造りの家屋形態を意味していると考えられる。「葛家」は文字通り、藁葺きもしくは茅葺き屋根の家屋であろう。「蔵家」と「葛家」は、屋敷地と家屋を所有している町人たち、つまり本家層の家屋形態である。したがって、安永の焼失記録(表-2)にもられる「本家」は、本家層の家屋を指していて、「蔵家」と「葛家」の和とみなすことができる。本家層の中には自宅とは別に貸家を所有している場合があり、これを「捌(さばき)」と呼んでいる<sup>7)</sup>。この「捌」にも「蔵家」の形態と「葛家」の形態があった。

これに対して「地名子家」は、屋敷地を借り、そこに家屋を構えている地名子たちの家屋を意味している。この言葉から家屋の形態はわからないが、本家層より一ランク下の家屋とみてよいであろう。「借屋」は、享保期や天保期の絵図において細長い四角で表記されているから棟割形式の長屋であったと考えられる。

この他、享保期(表-1)と天保期(表-3)には、4軒の「皮屋」がある。「皮屋」とは製皮・皮細工に関わっていた賤民で、これらはいずれも城下東南端のはずれ、春日町にあった。また安永期(表-2)には7軒の奉公人家がみられる。ただし、これらの具体的な家屋形態は不明である。

以上はいずれも住宅建築であるが、大野城下の町家建築としてこれらの他に多くの土蔵があった。

藩政期における大野城下の町家建築

表－１ 享保期の町家建築

町 名	蔵家之形(□)		葛家之形(○)		地名子	借屋	合計	蔵(蔵)	備 考
	(本家)	(捌)	(本家)	(捌)					
一番上町	7	2	28	2	3	・	42	1	
一番下町	13	4	40	10	1	・	68	1	
二番上町	・	・	20	5	5	・	30	4	
二番下町	・	1	39	13	9	・	62	3	
三番上町(大工町)	2	・	37	2	2	3	46	1	
三番下町	・	・	44	6	4	・	54	2	
四番上町	2	・	16	3	2	・	23	12	
鍛冶町	・	・	12	・	・	・	12	2	
四番下町	・	・	33	1	3(＊)	・	37	・	(＊)寺地名子1
五番上町	7	・	28	4	1	1	41	1	
五番下町	・	・	9	4	3	・	16	1	
比丘尼町	・	・	18	・	5		23	1	
寺町・後寺町	・	・	10	・	18(＊)	・	28	・	(＊)寺地名子15
ミヤノ小路	・	・	3	・	1	・	4	・	
正膳町	1	・	5	1	11	・	18	1	
石灯籠小路	・		1	・	7	・	8	1	
八間町	1	・	17	・	9	4	31	・	
七間西町	14	4	12	3	・	2	35	・	
七間東町	2	・	22	・	3	・	27	1	
六間町	5	・	25	2	10	2	44	3	
二の横町	・	・	9	1	2	・	12	・	
大鋸町	・	・	21	2	8	・	31	1	
横町	1	・	15	1	・	・	17	・	
東新町	・	・	17	2	2	・	21	・	
春日町	・	・	8	1	・	・	9	・	皮屋4
熊野町・同後町	・	・	11	・	1	・	12	1	
野口道・その他	・	・	3	1	5	・	9	1	
合 計	55	11	503	64	115	12	760	38	寺地名子16
	66		567						

表－２ 安永の火災で焼失した町家建築

町 名	本家	地名子	借屋	その他	土蔵	焼け残り家数
一番上町・横町	45	3	18	奉公人3軒	15	
一番下町	77	1	34		55	
二番上町・との町	43	12	58		2	5軒
二番下町	64	15	59		21	
三番町	93	8	48	奉公人2軒	24	
四番町	62	1	34		11	
五番町	62	7	38		41	1軒(上町)
比工(丘)尼町	38	5	36	奉公人1軒	6	42軒(含、春日町、地名子・借屋)
蓮光寺門前	・	6	15		・	
奥寮地内	・	14	・	奥寮1軒	・	
横町・大鋸町	19	1	17		・	84軒(含、熊野町、地名子・借屋)
七間西町	23	8	・		23	
七間東町	23	2	4		34	
鍛冶町(四番町)	18	3	7		12	
町)	12	1	12		1	
野口村の分	1(＊)	4	1	(＊)は火元	・	12軒(地名子・借屋とも)
合 計	580軒 (計算値も同)	73軒 (計算値91)	389軒 (計算値381)	奉公人7軒 寺院20ヶ寺	247軒 (計算値245)	144軒(焼残家数)

表-3 天保15年の町家建築

町 名	蔵家				地名子	借屋	借屋	蔵(蔵)	合計	備 考
	(本家)	(捌)	(本家)	(捌)			葛家			
一番上町	18	2	1	・	・	・		1	22	
一番下町	56	12	・	・	・	3		1	72	
二番上町	19	5	3	・	・	2		4	33	
二番下町	27	2	25	2	・	5	・	4	64	
三番上町(大工町)	13	2	29	1	・	2	1	2	50	
三番下町	19	4	28	5	・	1	1	2	60	
四番上町	6	・	13	2	・	3	1	9	34	
鍛冶町	6	・	6	・	・	1	・	2	15	
四番下町	1	・	36	・	・	・	1	・	37	
五番上町	32	6	5	2	・	1	・	・	46	
五番下町	3	・	11	4	・	1	・	1	20	
比丘尼町	・	・	11	1	・	・	・	・	12	
寺町・後寺町	3	・	14	・	・	2	・	1	20	
ミヤノ小路	・	・	3	・	・	・		・	3	
正膳町	9	1	2	・	・	2	3	1	18	
石灯籠小路	・	・	1	・	・	・	2	3	6	
八間町	6	1	6	2	・	3	6	3	27	
七間西町	19	2	・	・	・	2	・	・	23	
七間東町	27	1	8	1	・	・	・	1	38	
六間町	21	2	15	2	・	4	1	3	48	
二の横町	5	1	・	・	・	・	・	・	6	
大鋸町	7	・	14	6	・	・	・	2	29	
横町	15	1	1	・	・	・	・	・	17	
東新町	18	1	・	・	・	3	・	・	22	
春日・末吉町	・	・	3	・	・	17		・	20	皮屋4
熊野町・同後町	・	・	15	・	・	・		2	17	
比丘尼新町	・	・	9	・	・	1	2	・	12	
合 計	324	43	259	28	115	51	18	42	765	
	367		287							

### 3. 本家層の家屋形態(「蔵家」と「葛家」)

享保期における本家層の家屋は「捌」も含めて633棟である。このうちのほぼ9割に当たる567棟が「葛家」であり、「蔵家」はわずかに66棟に過ぎず、「葛家」が圧倒的に多かった。なお、「捌」は75棟で、11棟が「蔵家」形式、64棟が「葛家」であった。

表-1のもとになった享保15年の町絵図(図-1)によると、「蔵家」の大半は一番上町と七間西町に集中している。このあたりは大野城の表入り口である上町口に近く、城下の最も中心地であり、大店や豪商の家が建ち並んでいた。これら商家の家が「蔵家」の形態をもっていたのであろう。この他、四番上町と五番上町および七間東町にも「蔵家」が散見されるが、七間通りより北半の地域では一番通りを除いて「蔵家」がまったくみられない。また坂田玉子氏が指摘している<sup>8)</sup>ように、二番、四番、五番通りが七間通りと交わる角地には、城下の見張り役を務めた大きめの蔵家がみられる。これに対して「葛家」は、地域的な片寄りはなく、城下全域に広く分布していた。



図-1 大野町絵図（享保15年）

安永の焼失記録（表-2）によれば、この時の火事で焼失した本家は580軒であった。前述したように、これは「蔵家」と「葛家」の和である。これに焼失を免れた春日町や横町・大鋸町などの本家を考慮すれば、安永期における本家の数は600～650軒ほどになり、享保期とさほど変わらない。この間に大野城下に大火があつたり、大きな被害を受けた記録もないことから、享保期にみられた本家層の家屋はほぼそのまま安永4年の大火まで存続していたとみることができる。

ところが、天保期における本家層の家屋の様相は享保・安永期とは大きく違っている。

「捌」も含めた本家の総数は654棟で、享保期や安永期よりいくらか増加しているにすぎないが、享保期にはわずかに66棟、9%に過ぎなかった「蔵家」が367棟に増え、本家層の56%に及んでいる。天保15年（1844）の絵図によれば、「蔵家」は享保期にもみられた一番町や七間西町はもちろんであるが、二番町や四番町、五番町そして横町などにもあり、城下の南半の区域に広くみられるようになった。逆に享保期には9割を越し、城下全体にみられた「葛家」は287棟で、享保期の半数以下、割合は44%まで減少し、城下の東北を中心とした一画に集中しているだけで、享保期に比べて分布範囲も大幅に狭まっている。

以上のように、大野城下の本家層の家屋形態は、天保期において大きく変化していたことが指摘できる。

#### 4. 「葛家」から「板屋」へ

表-4 に藩政期における大野城下で発生したおもな火災の被害状況および火災対策の事例を示した。安永4年4月8日の大火から5年後の同9年にも330竈が焼失し<sup>9)</sup>、寛政元年（1789）<sup>10)</sup>、文化6年（1809）<sup>11)</sup>、同7年<sup>12)</sup>、さらに文政5年（1822）<sup>13)</sup>、同10年<sup>14)</sup>にも大野城下は相次いで大火に見舞われている。特に、寛政元年の火災では953竈が焼失、文政の両度の火災でも600竈以上が焼失している。こうした大火がしばしば起こり、大被害をもたらした要因のひとつに「葛家」があげられる。安永の火災後、藩はしばしば家作令を出し、「葛家」から「板屋」への変更を命じている。

まず、安永4年4月8日の火災から約1ヵ月半後の5月29日に「町蔵并商人宅板屋二建可申被仰付候、来年より建拵可申と申上候」との令を出し<sup>15)</sup>、町蔵と町方の商家を来年すなわち安永5年から「板屋」にするよう命じている。また寛政10年（1798）と同11年には本町（一番上町・下町）と七間町、五番町、横町など、城下の中心区域の家に対してやはり「板屋」への変更令を出している<sup>16)</sup>。しかし、寛政10年1月28日条に「一、町方家作の儀先年年限を切連々板屋二造り直し候様申付候向茂有之処、右之年限去越江候得共、板屋ニ立替候者ハ何程も無之候（後略）」とある<sup>17)</sup>ように、さほど効果は上がらなかったようで、たとえば、安永4年5月29日条には「土蔵之屋根迄仮家ニかやぶき仕間敷候、不勝手にて無拠者ハ各別之事ニ候と申渡」とあって<sup>18)</sup>、火災後の仮普請とはいえ茅葺の土蔵もあったほどである。したがって、「板屋」への家作令は出されているが、安永期以降も本家層の家はやはり「葛家」が主流であったとみられ、そのために大火

が相次ぎ、大きな被害を受けたと考えられる。

「葛家」から「板屋」への改変や建替えが急速に進展したのは、文政5年(1822)と同10年の大火後であろう。たとえば、文政5年の大火後、一番上町から横町、殿町の城下南端地域に火除け地が設けられ<sup>19)</sup>、文政10年の火災後には、それまで板葺きであった大野城三の丸の南櫓・北櫓が瓦葺きに変更されていて<sup>20)</sup>、大野藩の防火対策に大きな動向がうかがえる。町方においてもこのころ防火意識が強まり、「葛家」から「板屋」へ建て替えられ、天保15年の絵図にみられるような状況になったとみることができよう。

ただし、この時点でも本家層の4割近くは「葛家」であり、これに「地名子」や「借屋」を含めると、300を越す家屋が藁葺きであったとみられる。弘化3年(1847)3月21日に出された「火之元大切ニ致候儀者勿論ニ候得共、万一あやまち等有之候節も板屋ニ致置候得者防方格別致能候間、昨年二月申渡候通来亥年迄ニ心掛(後略)」の令<sup>21)</sup>は、これら藁葺き家屋に対して出されたものであり、安政5年(1858)にも「町方葛家の分、自今より板屋ニ被仰付度(後略)」とある<sup>22)</sup>から幕末に至っても藁葺き家屋が相当みられたことがうかがえる。

表-4 大野城下におけるおもな火災と家作令

火災の概要		火災の対応策	
元禄13年 (1700)	約700戸焼失	元禄期	町方に消防組織ありという
宝永8.2.8 (1711)	会所より出火、城内の南北御櫓、鳩門、家中屋敷約56戸焼失		
正徳4.3.1 (1714)	比丘尼町彦左衛門より出火、約192戸焼失		
安永4.4.8 (1775)	野口村太郎兵衛より出火、城内本丸などの建物、家中屋敷、城下の本家580軒、地名子73軒、借屋389軒、寺20ヶ寺、土蔵247棟など焼失(惣ノ竈数1,071)、焼残り家数144軒	安永4.4.23 (1775) 安永4.5.29	町方仲間30人が消防組を組織 来年より町蔵と商人家を板屋にするよう申付けあり
安永9.3.9 (1780)	二番下町東又屋吉右衛門借家より出火、本家171軒、地名子26軒、借屋115軒、牢屋、番屋、寺13ヶ寺など惣ノ竈数330		
寛政1.4.17 (1789)	町方の被害、本家472軒、地名子45軒、借屋377軒、寺9ヶ寺、町年寄2軒、御用達14軒など焼失、惣ノ竈数953	寛政10.1.28 (1799)	本町通りや七間町に板屋に造り直すよう申付けあり
		寛政11.2 (1800)	家作制限令、建替えの節は板葺き土掛にすべし、中位の者にも土蔵を奨励す
文化6.7.13 (1809)	三番町石灯籠小路下桶屋吉兵衛借屋伊助より出火、本家14軒、借屋10軒焼失	文化年中	火消組として松組と竹組を設け、その後旗組が設置される
文化7.8.4 (1810)	二番下町大工又兵衛より出火、類焼13軒、借屋27軒焼失		
文政5.3.5 (1822)	野口村長四郎方より出火、家中屋敷86軒、民家679軒、土蔵37軒など焼失	文政5.5.18 (1822)	一番上町札木突き当たりから曹源寺明地、同寺門前横町、殿町に火除地を設ける
文政10.5.19 (1827)	二番町大根葉清七より出火、城内三の丸、柳町・郡町・城代町などの家中屋敷179軒、町方の家604軒など焼失	文政11.2 (1828)	大野城三の丸の南北両櫓を板葺きから瓦葺きに替える
		弘化3.3.21 (1845)	一番町通、七間通、五番町などに対して5か年内に板葺きに替えるよう申付ける
		嘉永7.3.5 (1854)	火消組として松組、竹組、旗組の他に錦組、井組もあり
		安政5.2.6 (1858)	町方の葛家を板屋に変えるよう申付けあり

ところで、藩が奨励していた「板屋」とは板葺きの家屋で、これでも防火的に決して優れた建築とは言えないかもしれない。しかし、「板屋ニ作り替候ハバ、成丈薄ク候とも土懸ニ仕立候様相心得可申事」<sup>23)</sup>（寛政10年）あるいは「凡テ町方家作致直候節者何卒板葺土掛ニ致候様可相心掛事」<sup>24)</sup>（寛政11年）とあるように、ここで奨励されていたのは、屋根面を土で塗籠め、その上に板屋根を乗せる「板屋」であったことがわかる。これと同じ工法と思われるような土塗の屋根面の上に板葺き屋根を乗せた土蔵が現在も大野市内に数多くみられるのである。こうした板屋根であれば、たとえ火災に遭っても屋根の焼失だけですみ、被害も最小限に留められたのであろう。

## 5. 地名子家

地名子とは、屋敷地を借りている町人層で、階層的には本家層より一段ランクが下がる。これらの家屋形態はわからないが、本家層より小規模で、粗末な家屋であったとみられる。屋根はおそらく、藁葺きあるいは粗末な板葺き、たとえば杉皮葺きや樽板葺きのようなものであったろう。

享保15年の絵図には115軒の地名子家があり、「捌」を含めた本家層のほぼ2割程度にあたる。これら地名子家は、城下でも正膳町・六間町・八間町・大鋸町・石灯籠小路など、東西筋の通り沿いに多く存在している。また、寺町とその東の後寺町には寺の境内地を借りている「寺地名子」が多くみられる。寺地名子の家は、東西筋の通り沿いの地名子家が通りに面していたのに対して、境内地の中にあり、通りからやや奥まって存在していた。

安永4年の火災では91軒の地名子家が焼失している。この数は享保期よりやや少ないが、春日町や横町・大鋸町などに焼失を免れた地名子家もあることから、安永期における地名子家の数も享保期とさほど変わっていなかったとみられる。ただし、天保15年の絵図には地名子家の表記はなく、天保期における地名子家については不明である。

## 6. 「借屋」と「捌」

享保15年の絵図では、通りに沿って細長い四角で示された「かりや」があり、天保15年の絵図でも細長く示されているから、「借屋」は棟割形式の長屋と判断できる。現在の大野市内にも棟割長屋の借屋が数棟みられる。享保期の「借屋」は、大工町（三番上町）に3棟、八間町に4棟、七間西町と六間町にそれぞれ2棟、五番下町に1棟あり、全体で12棟みられるだけである。

ところが、安永4年の記録では389軒の「借屋」が焼失していて、享保期と大きく異なっている。安永の記録は本家・地名子家・「借屋」に奉公人の家と焼失寺院を含めて「惣メ千七拾壹竈」と記している。竈とは戸数、世帯数を表す言葉であるから、「借屋」381軒は借屋住まいの世帯数を指しているとみられる。仮に借屋1棟に4～6世帯が住んでいたとすれば、安永の火事で被災した「借屋」の数は65～95棟ほどになる。これでも享保期の12棟より多いが、「蔵家」形式の51棟と「葛家」形式の18棟を加えた天保期の「借屋」数69棟には類似している。

一方、本家層がもっていた貸家つまり「捌」は、享保期に75軒あり、そのうちの11軒が「蔵



家」、64 軒が「葛家」であった。天保期にも 71 軒みられ、「捌」の軒数はほぼ同じであるが、「蔵家」が 43 軒、「葛家」が 28 軒で、本家と同様に「捌」も享保期と天保期で両者の割合に大きな変化が認められる。

## 7. 土 蔵

享保 15 年の絵図に蔵印で示されている土蔵は 38 棟あり、天保 15 年の絵図にもそれに近い 42 棟の土蔵がみられる。これらは「蔵家」や「葛家」などと同じように通り沿いにあるから、土蔵造りの住宅とも考えられるが、仮に土蔵造りの住宅とすれば、「蔵家」よりもっと上質の住宅であり、「蔵家」と同じように本家層でも上層の家屋形態のひとつとして、城下の中心部に集中していたはずである。ところが、これらは一番通りや七間西町ではなく、二番通りや四番通りに多く、その位置からみると七間通りや六間通りに面してたつ町家の屋敷地の背後にたつ土蔵と判断できる。現在の大野市内にもこれと同じように通りに面してたっている土蔵が数棟みられるのである。そして安永 4 年（1774）の焼失記録の中で、土蔵が竈総数の中に含まれていない<sup>25)</sup>ことも住宅ではないことを示唆している。

ところで、安永 4 年に焼失した土蔵は 245 棟あり、享保期の 38 棟や天保期の 42 棟に比べてはるかに多い。これは享保や天保の絵図は通り沿いの土蔵だけを記しているのに対して、安永の記録は屋敷地背後にあった土蔵も含んでいるためとみられる。今回の調査でも市内で 200 余棟の土蔵が確認できたが、その多くは屋敷地の背後にあって、通りに面している例はわずかであった。藩政期も現在と同じような状況であったと考えられるのである。

このように大野城下に多くの土蔵がみられるのは、寛政 11 年（1799）12 月の家作令の中に、「中以下之者にてても土蔵ハ其分ニ応し、力にさへえ能候ハハ鹿相ニ成共建候様可相心掛事」とある<sup>26)</sup>ように、藩が一般的な町人に分相応の土蔵をもつことを奨励していたためとみられる。

なお、現在大野市内には、厚板葺き（あるいはその上に鉄板を葺く）の置屋根で、軒やけらばを方杖で支えている土蔵が数多くみられ、屋根面を土で塗籠め、その上に板屋根を乗せている。これまで述べてきた「蔵家」や藩が防火対策として推奨していた土掛けの「板屋」を思い興させる屋根工法を今に伝えている。

## 8. 結 語

藩政期の大野城下における町家の様相について次のことが指摘できる。

享保期や安永期、天保期における大野城下の町家建築は、本家層に「蔵家」と「葛家」の形態があった。彼らの中には「捌」と呼ばれる貸家を持つ者もいた。「蔵家」は塗家造りの家屋とみられるが、屋根は瓦葺でなく、土を掛けた板葺きであったとみられる。「葛家」は文字通り藁葺き、もしくは茅葺きの家屋である。享保期には本家層の約 9 割が「葛家」で、「蔵家」はおもに一番町や七間西町など城下の中心部にあった商家にみられたに過ぎなかったが、度重なる火災や藩の家作

令もあって、天保期には「蔵家」が「葛家」を上回るようになっている。それでもまだ城下の町家の半数近くが藁葺きであり、大野城下においては幕末に至っても瓦葺は普及していなかった<sup>27)</sup>。

屋敷地を借りて、家屋を構える地名子の家は、享保、安永期には100軒程度みられるが、正膳町や石灯籠小路などの東西筋の通りや寺町、後寺町通りに多くみられる。これらの家屋形態は本家層より一段小規模で、簡素であったとみられるが、詳細はわからない。また、棟割長屋形式の「借屋」は享保期に12棟あり、安永期や天保期に60棟～70棟ほどあったとみられる。この他、大野城下には多くの土蔵があり、安永4年の火災では実に245軒の土蔵が被災している。このように大野城下に多くの土蔵があったのは、藩の奨励があったためと考えられる。

(註)

- 1) 大野市文化財保護委員会編『越前大野城と金森長近』 昭和41年
- 2) 『藩史大事典 第3巻 中部編Ⅰ—北陸・甲信越』雄山閣出版 平成元年
- 3) 註2と同
- 4) 齊藤寿々子家所蔵(『絵図が語る大野 城・町・村』所収) 袋外題に「享保十五年八月改 町絵図三枚 筆筭三ばん」とあり。図中に「享保十五庚戌歳十月」との年紀がある。
- 5) 「大野町用留抜粋(天災地異ニ関ル事項)」安永4年4月8日条(大野市史編さん委員会『大野市史(第5巻) 藩政史料編二』昭和59年 所収)
- 6) 坂田玉子氏作成「天保十五年の大野町」
- 7) 坂田玉子「旧町名は語る 大野編 ③二番町」福井新聞 平成8年2月
- 8) 坂田玉子「城下町大野の道路と町角の屋号」(『奥越史料』第16号) 平成元年 所収)
- 9) 『大野市史(第5巻) 藩政史料編二』p287
- 10) 『大野市史(第5巻) 藩政史料編二』p289
- 11) 『大野市史(第8巻) 地区編』p47
- 12) 『大野市史(第8巻) 地区編』p44
- 13) 『大野市史(第8巻) 地区編』p47
- 14) 『大野市史(第5巻) 藩政史料編二』p293
- 15) 『大野市史(第5巻) 藩政史料編二』p285
- 16) 『大野市史(第5巻) 藩政史料編二』p101 寛政10年正月28日条  
「一、町方家作の儀先年年限を切連々板屋ニ造り直し候様申付候向茂有之候処、右之年限去越江候得共、板屋ニ立替候者ハ何程も無之候(中略)依て以来町方家作致替候節左之通相心(得脱か)可申候(中略) 一、本町通り上下不残 一、七間町ハ本町角より上下不残 一、五番町ハ七間町角より上不残 一、横町ハ五番町引続より横町持本通り之内不残 (後略)」
- 17) 註16参照
- 18) 『大野市史(第5巻) 藩政史料編二』p286
- 19) 『大野市史(第5巻) 藩政史料編二』p196
- 20) 『越前大野城焼失ニ付普請并石垣修復之覚』文政11年2月(『大野市史(第5巻) 藩政史料二』p274)  
「一、三丸櫓式箇所門壱箇所所有来板屋根今度瓦葺ニ仕度候(後略)」とある。
- 21) 『大野市史(第5巻) 藩政史料編二』p296
- 22) 『大野市史(第5巻) 藩政史料編二』p298
- 23) 『大野市史(第5巻) 藩政史料編二』p101
- 24) 『大野市史(第5巻) 藩政史料編二』p105
- 25) 『大野市史(第5巻) 藩政史料編二』p282 「惣ノ千七拾壱竈 外ニ土蔵貳百四拾七」とある。
- 26) 『大野市史(第5巻) 藩政史料編二』p105
- 27) 『大野市史(第5巻) 藩政史料編二』p78 文久元年辛酉年条  
「今般屋根構被仰出候御趣意并規定之事 出火之節御家中過半類焼等有之候而者当節柄別而一統可致難儀、上にて甚被為御懸念候ニ付瓦屋根ニ相成候者類焼之苦慮多分相通可申(後略)」とあり、文久元年に家中に対して瓦屋根を奨励しているが、町方に対する瓦屋根に関する記述はみられない。

(平成10年12月7日受理)